

付録 3

われらはコーランを平易にした [54:17]

第 11 章 1 節は、コーランの奇跡には次の二つが含まれることを教えています。[1] 物理的構造における超人的な数学的設計、および [2] 同時に並行して成し遂げられた、卓越した文学的作品としての構成です。

単純な数学的パターンであれば、数値の分布条件を満たすことは可能かもしれない。しかし、それは常に文学的な質の犠牲の上に成り立つ。コーラン全体を通じて、文学的スタイルと個々の文字の複雑な数学的分布（付録 1 参照）が同時に制御されていることは、コーランが暗記しやすく、理解しやすく、楽しむのが容易であるという事実からも明白です。人間が作った本とは異なり、コーランは何度繰り返して読んでも、無限に楽しむことができるのである。

この付録のタイトルは、第 54 章の 17、22、32、40 節で繰り返されている。結局のところ、コーランのアラビア語テキストは、読者や暗記する人に対して、次に続く正しい表現や節を思い出させるように構成されているのです。神は私たちを創造されたので、文学的な内容を私たちの記憶に定着させるための最も効率的な方法をご存知です。コーランの暗記は、書物が稀少であった時代に、世代を超えて原文を保存する上で極めて重要な役割を果たしてきた。

コーランを暗記する人は、意識せずとも、コーランの言葉を口にする際、複雑な文学的システムによって神聖な助けを受けている。コーランのほぼすべての節には、私が「メモリー・ベル（記憶の鐘）」と呼ぶものが含まれている。その機能は、次に何が来るかを読者に思い出させることである。このシステムは非常に広大だが、ここでは例として二つだけ挙げる。

1. 第 2 章の 127、128、129 節は、それぞれ二つの異なる神の名前で終る。これらの名前のペアはそれぞれ、「アル・サミーウ、アル・アリーム（全聴者、全知者）」、「アル・タウワーブ、アル・ラヒーム（贖い主、慈悲深いお方）」、「アル・アズィーズ、アル・ハキーム（全能者、至高の知者）」である。もしこれが普通の本なら、これら 6 つの名前を簡単に組み合わせ間違えてしまうであろう。しかしコーランでは違う。これらのペアの直前には、正しい名前のペアを思い出させる「メモリー・ベル」が存在する。

例えば、127 節はアブラハムとイシュマエルがカアバの基礎を築く場面で、「アル・サミーウ、アル・アリーム」で終わる。ここでの際立った音は「S」「M」「アイン（）」である。これら三つの文字は「Ismail（イスマイール）」という言葉の中で際立っている。この言葉は、文学的質を高めつつ、文章の中で意図的に後ろに配置されている。通常、人間が書くなら「アブラハム

とイシュマエルが基礎を築いた時……」となるが、あえて「イスマイール」の音を節の終わりに近づけることで、この節の正しい神の名前が「サミーウ (S-M-)」「アリーム (ゝ-L-M)」であることを思い出させてくれるのである。

128 節には「タウワーズ、ラヒーム」の直前に、際立った「トゥブ (Tubb)」という言葉があり、これがメモリー・ベルとして機能する。129 節の終わりの名前は「アズィーズ、ハキーム」であるが、ここでの際立った音は「Z」と「K」である。明らかに、この節のメモリー・ベルは「ユザッキーヒム (Yu-zak-keehim)」という言葉です。

2. もう一つの良い例は 3 章 176、177、178 節にある。ここでは不信仰者への報いがそれぞれ「アズィーム (甚大)」、「アリーム (痛烈)」、「ムヒーン (屈辱的)」と描写されている。人間が作った本ならば、暗記する人はこれら三つの形容詞を混同しやすいであろう。しかし、各形容詞の前には、混同を防ぐ強力なメモリー・ベルがある。

176 節の「アズィーム」の前には、強調された「Z」の音を持つ「フズン (Huzzun)」という言葉がある。177 節の「アリーム」の前には「イーマーン (Iman)」という言葉の音がメモリー・ベルとして機能し、178 節の「ムヒーン」の前には、節全体に「M」と「H」の音が溢れている。

他にも、3:173 の終わりと 3:174 の始まり、4:52 の終わりと 4:53 の始まりなど、メモリー・ベルの例は数多く存在する。